

第112回生涯現役講座 講演要旨

日 時：平成23年9月25日 13:00～14:50

会 場：能見台地区センター多目的室

参加者：28名

演 題：明治維新と西洋音楽事始

講 師：心のふるさとを歌う会代表 高橋 育郎氏



昭和10年生 千葉市在住。元国鉄職員、関東支社・管理局・駅長等35年間勤務 退職後は童謡の作詞を手掛け 現在（社）日本童謡協会会員、心のふるさとを歌う会主宰

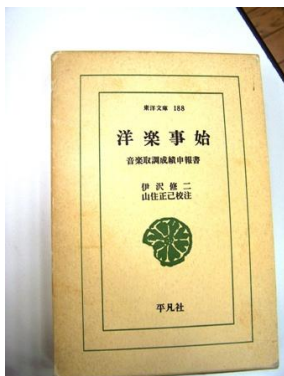
今回の講演会はユニークな形でスタートした。

講師の高橋先生が作詞した「生涯現役 実践音頭」を会場全員による合唱で始まった。

- | | | |
|---|---|-----|
| 1 人生五十は むかしのことよ
いまじゃ八十 長生き時代
伸びた生命は めでたいが(ソレ)
伸びた蕎麦では まずくて食えぬ
背筋ピンとして 腰を入れ
夢をひろげて 生きてゆこう
(ソレ シャンシャンと シャンシャンと
シャンシャンとな) | 2 余生隠居は むかしのことよ
いまじゃ生涯 現役時代
人生いつでも 青春だ(ソレ)
健康第一 心が二番
経済家庭に 交流と
もう一つ大事な 好奇心 | 3 略 |
|---|---|-----|

2番の歌詞の中に健康、心、経済、家庭、そして交流と「K」が続くが、当かなざわ会門口代表から、もう一つ大事な好奇心という「K」があるよとの進言を受け追加したいきさつのある音頭です。国鉄入社動機は国鉄合唱団にあこがれ、音楽をやりたい一心から志

望した。音楽を生きがいに退職後、ライフベンチャークラブ（生涯現役塾）に入会して、門口代表と出会い以後交流がつづき今日に至っている。



I 新しい音楽教育のはじまり

我国に音楽教育が導入されたのは明治5年（1872）の「学制」発布にはじまる。明治政府は文明開化の名のもと欧米諸国に追いつけ、追い越せをモットーに近代化のため富国強兵、殖産振興を推進したが一方では教育重視の方針を打ち出し、新しい音楽教育の道を開いた。その背景には岩倉使節団の動きがあった。

明治政府は岩倉具視を全権大使とした使節団を明治4年（1871）から6年にかけて、米国、ヨーロッパ諸国に派遣した。目的は種々あったが友好親善と欧米先進国の文物視察と調査が主であった。一団のメンバーには木戸孝允、大久保利通、伊藤博文等に後に文部大臣になった田中不二麿がいた。また留学生として津田梅子もいた。一行は西洋文明の政治、経済、教育、文化など様々な分野の見聞を広めたが、とりわけ着目したものに教育・学校制度があった。欧米の学校教育は国語から理数科、芸能、体操とカリキュラムが多種に亘っており、音楽はオルガンを弾き、声を出して歌い、校庭に出て遊戯をする等その内容に驚きと新鮮な感覚を得た。これらは岩倉使節団の報告書である「米欧回覧実記」に記載されている。（神宮外苑絵画館正面玄関には一行の出発風景の絵画が展示されている）



明治5年の「学制」発布以降、音楽教育が必要であるとの認識は広まり、小学校に「唱歌」、中学校に「奏楽」を導入したが指導者がなく「当分之を欠く」として実施にはいたらなかった。(音楽の導入には二つの流れがある。①歌のない流れ(鼓笛隊→軍隊→奏楽→オーケストラ) ②歌を歌う流れ(唱歌→小学唱歌))

政府は音楽教育の師はアメリカを範とする方針を出し、明治8年(1875)師範学校教育調査のため伊沢修二をボストンに留学させ、米国の指導者で第一人者であるメーソンのもとで勉強させた。

伊沢修二は目賀田種太郎らと音楽教育の体系を模索、明治12年(1879)政府に「音楽取調掛」を具申して設立させ、伊沢は掛長に就任し、唱歌を始めるためメーソンを招聘した。当時の日本音楽は五線譜がなく西洋の音階のドレミが歌えなかった。欧米の7音音階に対して5音音階の民族で、音楽的に後進国とみなされ、7音音階を歌えるように努めた。また学制を発布し、直ちに小学校と師範学校の建設に着手して音楽教員の養成や学校教育用楽器の検討もすすめ、音楽教育の普及に注力した。明治14年(1881)「小学唱歌集初篇」が文部省から出版、この中に西洋の楽曲に日本語の歌詞を付したものに「蝶々」「見渡せば」「蛍の光」などがある。その後第3集までを出し、伊沢は日本音楽の「和」と西洋音楽の「洋」を折衷させることに尽力し、日本人による日本の音楽(国楽)の確立をめざした。最初の功績者は滝廉太郎であり、山田耕筰につながって行く。明治19年(1886)に文部大臣森有礼に対し音楽学校設立の建議書を提出、翌20年に東京音楽学校(現東京芸術大学)が設立され、伊沢が初代校長に就任した。

このような業績から伊沢は「日本音楽の父」と言っても過言ではない。明治22年(1889)憲法発布の日の朝、森有礼が暗殺されるという悲劇があった。

II 吹奏楽について

西洋音楽は太鼓(鼓笛隊)に始まった。幕末に薩摩、長州に鼓笛隊が誕生し、官軍の江戸進攻には「宮さん 宮さん・・・」(大村益次郎の作曲といわれている。このとき五線紙の楽譜はない)を鼓笛の演奏をして行進した。これは画期的であった。この鼓笛隊育成には英、仏両国の貢献があった。明治4年(1871)に陸軍、海軍に本格的な軍楽隊が発足、行軍における演奏だけではなく公式な儀式でも演奏している。

(日本における最初のオーケストラ(交響楽団)は山田耕筰がドイツ留学から帰国した大正4年(1915)頃にはじまった)



○ 君が代

明治13年(1880)に日本の国歌として「君が代」が採用された。明治初期、英国のフェントンが国歌あるいは儀礼音楽を設けるべきと進言し、薩摩藩隊長の大山巖が受け、発案したとの説がある。当初フェントンによって作曲がなされたが洋風の曲であり、日本人にないもので普及しなかった。明治13年に宮内省雅楽部の林広守らの尽力で完成、奥好義が作曲したと伝えられている。

○ 鹿鳴館

日本の欧風化を發揚するため、明治16年(1883)に西洋風のダンスを踊るための施設、鹿鳴館が誕生した。これは外国からの賓客や外交官を接待する「舞踏会」や「祝賀会」を催す社交場として作られた建物で、西洋のワルツ(舞曲)が演奏された。演奏は陸軍と海軍軍楽隊があたった。

○ 浅草オペラ

本格的オペラをめざし、渋沢栄一らにより帝国劇場が建設されたが、日本人に馴染めず、大正時代に大衆向け娯楽として浅草オペラが台頭し、田谷力三、藤原義江、榎本健一などのスター出現が一世を風靡した。関東大震災と共に滅亡した。

○ 童謡

大正7年(1918)鈴木三重吉の「赤い鳥」の創刊を契機に誕生した。文部省唱歌に対抗して出来たもので、人間性と芸術性の豊かな歌を作ろうとはじめた運動であり、大人が子供のために思って作ったこの童謡は、日本が世界に誇る日本の文化である。

先生は平成5年(1993)に「日本童謡協会」に入会した。作詞家として活躍されており、平成13年(2001)の作品“大きな木はいいな”が全国童謡歌唱コンクール(大人の部)で見事に「金賞」を受賞されました。また昨年の“ぞくろ”の詞が東京都児童作曲コンクールの課題詞に選ばれました。現在“日本橋音頭”をドイツの合唱団との交流を記念して作詞しました。過去の作品のJASRAC登録済数は250曲余に達しているそうです。



<質疑応答>

- **Q**：「横浜市歌」は森鷗外の作詞ですがどのような経緯で依頼したのか？

• **A**：横浜市歌は明治42年（1909）横浜港の「開港50年記念大祝賀会式典」の席で発表されたもので作詞：森鷗外、作曲：南能衛（よしえ）の作です。横浜市が東京音楽学校に仲介を委託して完成されたもので、横浜は昔、寒村からスタートしたが将来の大発展を見越して文豪、森鷗外に依頼したのではないかと推察します。

（記 録：太田 吉信）



左は太田さん、右は高橋育郎氏



懇親会で先生を囲んでのひと時